

少子高齢社会のウェルビーイング創成型地域学習コンテンツの開発 —東旭川における高齢者参画型地域資源マップの効果と課題—

青柳かつら

Key Words 高齢者 (Senior citizen)、地域学習 (Regional education) 地域資源マップ (Regional resource map)、博物館 (Museum)、アンケート (Questionnaire)

1 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

近年、人口減少や超高齢社会対策は全国の自治体に共通する課題となっている。北海道では、今後大幅な人口減と高齢化の進行が予想される。すなわち2045年に推計人口は、約 400万人 (2015年時の-25.6%) となり、道内全179市町村で2015年より減少し、高齢化率は42.8%に達する (国立社会保障・人口問題研究所2018)。自治体の存続や、産業・くらしの活力低下が懸念される。

問題の解決には、若者の雇用の場や住民の地域志向が不可欠であるが、これらのペースとなる、地域の個性や誇りを再生することが重要である。解決の1方策として、地域博物館が、高齢者と協働して、地域独自のモノ・知識である「地域資源」を活用して住民が暮らす誇りを生み出すこと、この具体策として地域文化のアーカイブづくりに参画することを考えた。これらには、高齢者の社会参加 (柴田・杉原 2005)、地元学 (吉本 2008) の発想に基づく住民自治、超高齢社会における博物館の新たな役割発揮 (青柳 2016、2018) といった意義がある。

こうした着眼から、本研究では地域博物館を拠点に高齢者と地域資源マップを製作し、この効果と課題を明らかにすることを目的とした。

(2) 方法

筆者は、2016～17年、旭川兵村記念館友の会有志による地域資源マップ (以下、マップ) 製作にファシリテーターとして参画した。

調査は、まず、1) マップの製作と活用の過程について、何が起き、何が重視されたかについて、参与観察した。次に、2)-1 マップの校了時に校正会議に参加した製作者、2)-2 マップを普及する報告会の参加者を対象に、アンケートを行った。マップの効果と課題を把握するため、このアンケートでは、製作者には、マップ製作の経験と振り返り、参加者にはマップの感想をたずねた (表1)。さらに、3) マップ製作過程において、市民活動の主体性と継続性のキーとなる「意欲 (動機付け)」が実体化できたかについて、松本 (2003) が、X理論・Y理論 (McGregor 1960)、欲求段階説 (Maslow 1943)、動機付け要因・衛生要因 (Herzberg 1968) に、企業社員への意識調査を加味して抽出した8項目から評価した。あわせて、マップの活用事業として、4) 2018年に実施された東旭川公民館主催「東旭川日帰りバスツアー」を参与観察した。

表1 アンケート調査質問項目

製作者	報告会参加者
1 マップ製作の経験有無 a. 参加型マップづくりの経験、 b. 子ども向け文章づくりの経験	1 マップの感想 (5段階評価) 1) マップを見て、なかなかおもしろいと思った 2) マップを見て、気づいていなかった東旭川の魅力を再発見できた 3) 東旭川の歴史・文化・自然について新しい知識が得られた 4) 昔のことを思い出して心が元気になった 5) マップは、地域の人々の絆や暮らし愛着を育てるのに役立つ 6) マップは、地域の魅力を子ども達や地域外へ伝えるのに役立つ
2 マップ製作の振り返り (5段階評価) 1) マップづくりは、思ったより苦労が多かった 2) マップづくりは、思ったよりも面白かった 3) 気づいていなかった東旭川の魅力を再発見できた 4) 東旭川の歴史・文化・自然について新しい知識が得られた 5) マップは、地域の人々の絆や暮らし愛着を育てるのに役立つ 6) マップは、地域の魅力を子ども達や地域外へ伝えるのに役立つ	7) 今後もマップを活用した行事があれば、参加したい 8) マップを子ども達や東旭川外の人にも紹介したい
3 マップづくりに参加してよかったこと (複数回答可)	

をかけたのは、原稿の読み合わせである。他事例の学習を踏まえ、マップの解説文は150字～200字と決めていたが、メンバーから提出された原稿は、後述のように展示パネル製作の経験から、学術的で長大な文章になりがちであった。第1段階で決めた、優先するターゲット「子ども（小学校4年生程度）」について再確認し、北海道博物館総合展示のガイドブック（北海道博物館 2016）も難易度の参考として、会議で原稿の読み合わせを繰り返した。作業の効率化のため、原稿は電子データで提出してもらい、提出された原稿は、即時に会議にてプロジェクターで投影して読み合わせた（写真4）。こうしてファシリテーターである筆者や事務局の投げかけもあり、メンバーの納得を引き出しながら、掲載文を難しい漢字や抽象表現を避けた、シンプルな文章へと推敲した。

第2段階では、このようにアイディアの収束・整理といった「構造化」、まとめ・分かち合いといった「合意形成」を繰り返しながら、紙面を練りこんでいった。

第3段階では、マップの正式名称「ぐるっと東旭川たんけんマップ」を掲載した表紙が完成し、全ページの内容を最終確認した。その他、入稿までの微細な確認作業を行う最終チェックリーダー、発行後のマップ活用を担う、活用計画リーダーを決定した。

第2～3段階に実施した活用計画策定では、「まず友の会の行事によって同会員にマップを使った学習機会を提

供し、次に一般住民への普及へと活用事業を発展させる」、「東旭川内の組織機関と連携して、マップ掲載地の見学ツアーを開催する」といった方針も決めることができた。こうしてマップは2017年1月に完成した。

(3) マップの紙面とその製作

a. 表紙「ぐるっと東旭川たんけんマップ」（別図1右側）

寒冷地での米の大量生産を実現させた歴史を同地の個性と位置づけて、「ようこそ！ 上川百万石の礎 東旭川へ」をマップのキャッチフレーズとした。水彩画を得意とするメンバー（後述石井氏）が、このキャッチフレーズに合う、東旭川らしい景観として、大雪連峰を背景に、秋に稲穂が黄金色に輝く稲作地帯のイラストを作成した。表紙はこれをメイン、記念館所蔵の「屯田兵絵巻⁽²⁾」をサブのイラストとして、地は黒を基調とした配色で、イラストを際立たせるデザインとした。ターゲットに配慮して、マップ名称とサブのイラスト（入植当時の切り株の残る水田、動物たち）は、子どもにも親しみやすく、地域の個性と歴史を直感的に理解しやすいものにした。合わせて、モノクロにした屯田兵絵巻を背景に、地域概要とマップを紹介する文章を掲載した。

b. マップ面「地域の歴史・みどころ紹介」（別図2）

東旭川の鳥瞰図をメイン・イラストとして、6地区の地域資源24個を選びすぎり、イラストと写真、地区紹介と共に解説した。個々の素材製作や寄稿依頼は、部会メンバー全員で分担した。メイン・イラストは後述石井氏の作で、緑色を基調に、防風林、都市公園などの緑地、そして旭山、三角山（岩山）、21世紀の森といった森林がひろがる、東旭川の自然豊かな田園風景を表現した。2つのコラム「旭川神社のお祭り^{みこし}と御輿」、「東旭川八景」を掲載した。前者では同神社の欄干に、表紙のキャッチフレーズに合った解説文の寄稿と写真提供をしてもらい、紙面製作に部会メンバー外の住民参加も得た。後者は、東旭川のビューポイント8箇所を、イラストと写真、短い文章で紹介し、その位置をメイン・イラストにプロットした。鳥瞰図を中心に配置して豊富な情報をまとめた一覧性は、マスコミからも高く評価された。

c. 特集面「東旭川市街のまちなみ」（別図1左側）

入植から120年余を経て大きく変わった、同市街の景観を、「屯田兵絵巻」、大正・昭和期の写真、現在の写真の比較によって、ビジュアルに紹介した。現在の写真は、メンバーの人脈で、市街のビルから許可を取り、昭和期の写真と同じ方向から撮影するなどの工夫をした。モノクロとカラーの写真の対比によって、時代の変化を表現し、子どもにもわかりやすく、遊び心のあるページに仕上げた。

表2 マップ製作会議の経過

番号	段階	年月日	区分	主な議題	参加人数(人)
1	1	2016年3月6日	運営委 ¹	1) 事例勉強会①「朝日町マップ製作と活用」、2) 製作目的・ターゲット・仕様検討、3) 製作部員決定	12
2		4月3日	1	1) 前回議論の共有、2) 製作目的等検討	8
3		5月15日	2	1) ワークショップ: 掲載内容、トピックス検討	6
4		6月18日	3	1) 事例勉強会②「マップの構成・記事づくりの手法」、2) マップ面構成案・担当者決定	6
5	2	7月25日	4	1) 作業成果提出と読み合わせ①	9
6		8月29日	5	1) 読み合わせ②	9
7		9月11日	関連行事	「ペーパンの郷土芸能」	42
8		9月11日	臨時	1) 宿題確認、2) 作業分担	6
9		9月26日	6	1) 読み合わせ③	9
10		10月17日	-	プレスリリース	-
11		10月31日	7	(マスコミ取材) 1) 読み合わせ④	6
12		11月16日	8	1) 読み合わせ⑤、2) 配布・活用計画案決定	8
13	3	12月2日	9	1) 最終確認、2) マップのタイトル決定、3) 最終チェックリーダー、活用計画リーダー決定	9
					計 130

1) 「旭川兵村記念館友の会運営委員会」を指す

d. 特集面「東旭川の名物」(別図1中央)

6月18日の事例勉強会(表2-番号4)での学習成果を応用して、丁寧な現地取材によって、東旭川のおいしい食べ物(特産品)を紹介した。女性2名が、原稿の分担が決まってから約1ヵ月で仕上げ、7月25日部会(表2-番号5)にて原稿を提出し、そのスピードと完成度の高さは、部会メンバーをあっという間に驚かせた。続くマップ製作作業のはずみとなり、メンバーの自信につながったページである。

(4) マップの完成とその後

このマップ製作プログラムの特徴は、文章やイラストづくり、写真撮影等を部会メンバーで役割分担し、実質的に市民が主体となってマップを製作したことである。「市民参加型」と銘打つマップ製作であっても、市民の役割は、事業主体(観光協会・行政等)が示す案やテーマに、意見や要望を述べるのみで、製作実務はプロのコンサルタントやデザイナーに任せてしまう例も多い。

今回のように市民参画を実体化したマップを短期間で製作できた理由として、まず、メンバーの資質として、高齢者ならではの知恵や知識を備え、かつ文章力や情報収集力のある人材が集まったことがある。メンバーは学校教員OBが30%、PCリテラシーを持つ人が半数を占めた。高齢者でありながら、ウェブでの情報収集と現地取材、電子メールでの連絡、デジカメでの写真撮影を得意とするメンバーが半数から複数名いた。既述のように、水彩画が得意で、鳥瞰図を描くことのできるメンバーもいた。メンバー全般の資質の高さは、筆者がこれまで山

間地で開催してきたマップ製作事例(青柳 2014)では見られなかったことであった。

次に、友の会が記念館の特別展を担うことで蓄積した学習成果を活用できたことがある。東旭川内各地区の歴史研究の成果は、同地区紹介の原稿製作に大きく役立った。

運営面では、月1回の会議を定例化して「1年以内に完成」と期限つきの目標を設定して集中して作業できたこと、議論の繰り返しを避けるため、議事録メモを作成し、毎回の会議では、必ず冒頭で前回の討議結果を確認したことがあげられる。

そして特筆すべきは、友の会会員の人脈を活用して、製作半ばの2016年10月中旬にプレスリリース(表2-番号10)を行った結果、10月31日の部会会議(表2-番号11、写真5)に地方紙2紙の取材がなされ、この報道によって対外評価が得られたことがある。メンバーからは「マップの完成が楽しみになってきた」、「マップを記念館入館者数増加への起爆剤(状況転換を促すツール)にしたい」との声もあがり、「自分たちのマップ」として製作意欲を刷新できた。

マップは2017年3月に1万部を発行し、東旭川内を中心に約7,000部を配布した。このうち、記念館の地元である旭川中学校と旭川小学校には、全児童・生徒数を網羅する計990部を配布した。マップの完成は地方紙、FMラジオ局などによって報道され、好評を得た。

2017年6月には、記念館・友の会行事として、筆者を講師に、マップ完成報告会が開催された(写真6)。この報告会には住民30名が参加した。参加者の年齢構成は正確には把握できなかったが、60代半ば以上の高齢

表3 参加型マップづくりの経験(N=8)

	回答数	比率(%)
今回が初めて	5	62.5
2回目	0	0.0
3回目以上	3	37.5
計	8	100.0

表4 子ども向け文章づくりの経験(N=8)

	回答数	比率(%)
今回が初めて	6	75.0
経験あり	2	25.0
計	8	100.0

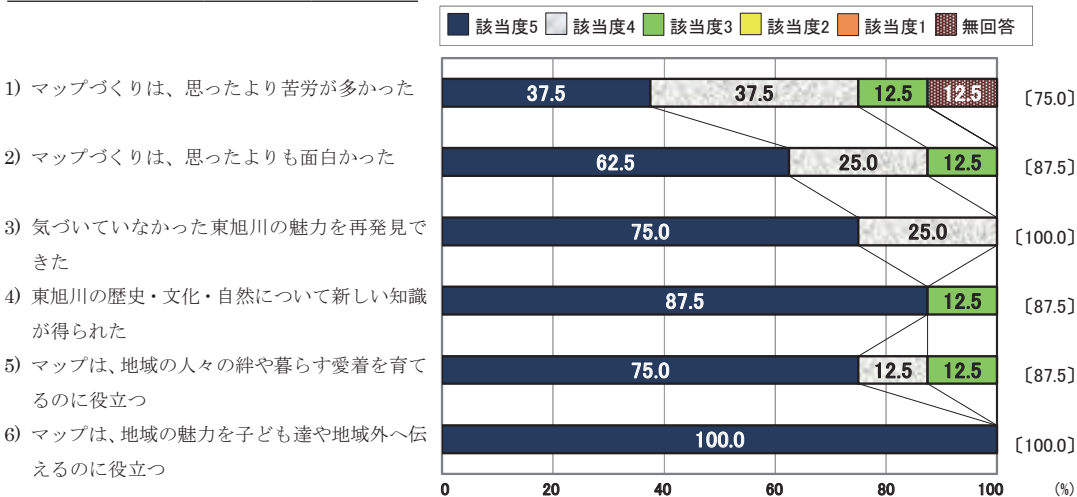


図2 製作者によるマップ製作の振り返り

注) □ 内数値は該当度4以上の比率を示す

者が殆どであった。同報告会では、製作メンバーが自らマップの見どころを解説し（写真7）、筆者はマップ活用計画を具体化する重要性を強くPRした。同報告会では、地方局のテレビ取材も合わせて行われた。

3 マップ製作の効果と課題

(1) 製作者アンケートによる効果把握

マップ製作者である、筆者を除く部会メンバーへのアンケートでは、8の回答が得られた。

まず、参加型マップづくりの経験では62.5%、子ども向け文章づくりの経験では75.0%と「初めて」の人が過半数であった。

次に、マップ製作の振り返りについて、該当度5を「とてもそう思う」、該当度1を「まったくそう思わない」とする5段階評価では、「1）マップづくりは、思ったより苦労が多かった」は、該当度4以上の肯定意見が75.0%、同様に「2）マップづくりは、思ったよりも面白かった」が87.5%と多数だった。マップづくりは容易ではなかったが挑戦的で達成感が得られていた。

次に、地域学習面について、「3）気づいていなかった東旭川の魅力を再発見できた（該当度4以上100.0%）」、「4）東旭川の歴史・文化・自然の新しい知識が得られた（同87.5%）」と多数で、新たな気づき・知識獲得といった効果が得られた。

また、設定した製作目的に関連する「5）マップは、地域の人々の絆や暮らす愛着を育てるのに役立つ（同87.5%）」、「6）マップは、地域の魅力を子どもたちや地域外へ伝えるのに役立つ（同100.0%）」と多数であった。特徴的なのは、質問3）～6）の「該当度5」がいずれも75%以上と極めて比率が高いことであった。マップ製作作業を経て、部会メンバーは高い学習効果と目的達成への意欲・自信を獲得していた。

最後に、マップづくりに参加してよかったこと（複数回答可）については、「楽しい思い出が増えた（100.0%）」、次いで「昔の記憶で心が元気になった（75.0%）」が多数であった。高齢者を中心とするメンバーにとって、マップ製作は、何より楽しく、自分の経験を活かす社会参加の場、回想によって脳が活性化され、元氣を得られる場としての機能も有していた。

表5 マップづくりに参加してよかったこと（N=8）〔複数回答可〕

	回答数	比率 (%)
楽しい思い出が増えた	8	100.0
昔の記憶で心が元気	6	75.0
チームワーク向上	5	62.5
新しい出会い	4	50.0
挑戦したことが達成	1	12.5
その他	1	12.5

注）回答総数は25、1回答者当たり選択肢を3.1個回答

- ☐ ①明瞭で意義ある目標がある
- ☐ ②目標を設定する機会に参画する
- ☒ ③責任ある仕事を担当する
- ☒ ④達成感と感激を味わうチャンスに巡り会う
- ☒ ⑤創意工夫を凝らす
- ☒ ⑥途中の区切りでフィードバックがされる
- ☒ ⑦少し難しいことに挑戦する
- ☒ ⑧成果がきちんと認められる

図4 動機付けの達成からみたマップ製作の評価

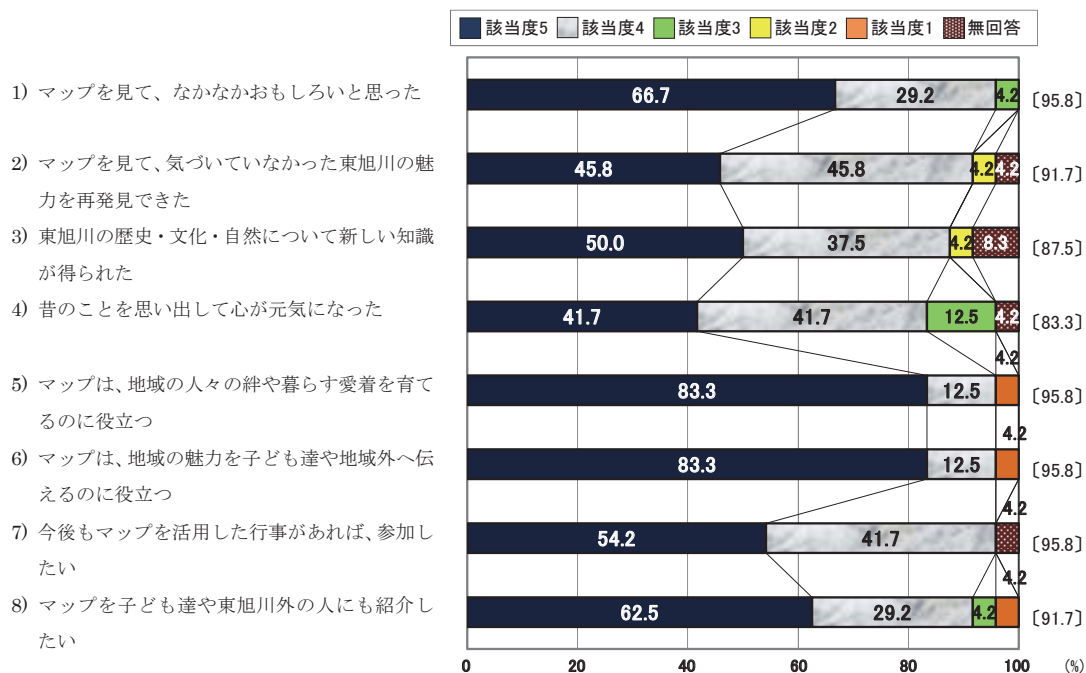


図3 報告会参加者によるマップの感想

注) 内数値は該当度4以上の比率を示す

(2) 報告会参加者アンケートによる効果把握

マップ完成報告会の参加者アンケートでは、28の回答が得られた。

マップ製作者と同様に、マップへの関心、地域学習、製作目的などに関連した、いずれの質問項目においても、該当度4以上が80%を上回る高い評価が得られた。

特徴的なのは、「該当度5」について、「5) マップは、地域の人々の絆や暮らす愛着を育てるのに役立つ」と「6) マップは、地域の魅力を子どもたちや地域外へ伝えるのに役立つ」がともに83.3%と極めて高かったこと、「8) マップを子ども達や東旭川外の人にも紹介したい」が62.5%と多数だったことである。

すなわち、報告会を通じて、製作者—報告会参加者間でマップの製作意図が伝達され、地域の文化伝承への意欲を共有できた。

さらには、「4) 昔のことを思い出して心が元気になった」について、該当度4以上の肯定意見が83.3%と多数を占めた。マップは、製作者だけでなく、高齢者を中心とした参加者にとってもよい効果があった。すなわち、子どもを優先的なターゲットとして製作したマップであったが、高齢読者向けに回想法のツールとしても使用できる可能性があることがわかった。マップが、幅広い世代のニーズをカバーして、多様な場面で活用できる可能性が示唆された。

(3) 現れた課題

1) 製作者が高齢者であるゆえの危機

他方、予想外の出来事もあった。マップ発行の直前、記念館館長で部会の事務局でもあったキーパーソンが74歳で亡くなった。驚いた筆者は、マップ活用事業の具体化、故人の遺志実現を部会メンバーに訴えた。しかし、記念館の運営は、後継者の人材探し、急な引継ぎなどで多忙となり、まずは通常業務の維持に重点が置かれ、報告会以外のマップ活用事業が一時停止した。これらはやむを得ない面があり、キーパーソンが亡くなるという、マップ製作者が高齢者であるリスク、逆境でメンバーが熱意を継続することの困難と重要性が明らかになった。

2) 製作者の主体性とその持続

前項までの経緯と結果をもとに、既述の松本の8項目によって、今回のマップ製作活動を評価した(図4)。

すなわち、③以降の項目は、既述のように、メンバーの得意分野を活かした適切な役割分担(③、⑤、⑦)、マスコミ報道やマップ完成報告会での他者からの高い評価(④、⑥、⑧)によって達成できた。これらの動機付けにより、マップ製作は、「やらされている」ものではなく、「やりたい」ものとして部会メンバーの主体性が

高まっていった。

しかし、「①明瞭で意義ある目標がある」、「②目標を設定する機会に参画する」については、下記の理由から不十分だった。松本(2004)が示すように、目標とは、「誰が、何を、いつまでに、どのレベルまで」を具体化することが不可欠である。本活動においては、2-(2)に示した、部会での共有事項「住民が地域の個性や歴史を東旭川内外にPRできるようにする」、「東旭川内の結束やつなかりを再生する」、そして「東旭川内の組織・機関と連携して、マップ掲載地の見学ツアーを企画する」等は、あわせて具体的な目標の設定が必要な「目的」、「方針」にとどまるものであった。

「住民が地域の個性や歴史を東旭川内外にPRできるようにする」、「東旭川内の結束やつなかりを再生する」といった目的は、マップの「製作」と「普及・活用」を土台の両輪とし、事業の継続的な展開や住民自治の取り組みまでを含む、社会的な意義を有する大きな活動使命である。この目的について、「1年以内にマップを完成させる」という製作面の目標に関しては、部会会議で合意し、繰り返し確認しあうことで、関係者の主体性の発揮と高い実行力によって達成できた。しかし、マップの普及・活用面に関しては、製作期間内に十分な議論はできず、具体的な目標を設定することができなかった。

そして、部会の運営面では、マップ製作の開始期にリーダー選出のために多くの時間を失ってしまうマイナス、経験のない作業へのメンバーの不安感を加味して、リーダーを配置しなかった。

代替措置として、筆者と事務局が、場の進行役として様々な投げかけや助言をして、メンバーが各自の役割に応じて核になりあい、主体的に役割発揮できるような環境整備に努めた。そして、2-(2)に示した第3段階において、メンバーの作業に対する意欲や自信が高まってきた時に、初めて活用計画リーダーら、複数のリーダーを決定した。

しかし、上記のように故記念館館長が担っていた事務局機能が失速すると、遠隔地に居住する筆者のファシリテーションの力量不足もあり、部会メンバーの主体性を具体的な行動として実体化させていく、会議の場の設定等は困難になった。

4 マップの活用

(1) マップ活用事業のはじまり

2017年9月、東旭川の高齢化や人口減少を危惧し地域の活性化に問題意識を持つ、マップ活用計画リーダー石井征士氏がツアー・ガイドを引き受け、マップ掲載地の見学を内容とする「東旭川を巡る日帰りバスツアー」

(東旭川公民館主催、25名参加) が実施された。記念館は同ツアーの訪問地の一つとなった。

翌10月には、石井氏をガイドに、「旭山公園散策会」(旭川市公園緑地協会・旭山を活かす街づくり市民の会主催、80名参加) が開催された。

これら事業は、部会メンバーやファシリテーターである筆者は直接には関与せず、記念館の協力を得ながら石井氏が自分の人脈やガイド能力を発揮して行った取り組みであった。しかしながら同事業ではマップが配布され、友の会会員を主な対象とした、マップ完成報告会(2-(4))を発展させた形で、一般住民対象のマップ活用事業を実現することができた。こうした方法で、部会の活用計画策定で定めた2つの方針(2-(2))が実体化され始めた。これら事業の参加者には、地域資源の探索の機会を提供でき、マップの存在をPRすることができた。

2018年4月以降は、記念館にて、マップに掲載のある、旭川電気軌道の旧電車(東川線・東旭川線、1972年まで運行)の歴史を紹介する特別展、記念館と友の会の共催で旧電車の遺跡を訪ねる現地見学会が開催された。

(2)「東旭川日帰りバスツアー」

2018年9月12日、「東旭川日帰りバスツアー」が開催された。このツアーは、マップ掲載地でもある東旭川内の地域資源、11箇所を見学し、その魅力を再発見しようという主旨の東旭川公民館主催の講座で、旭川市内に居住する住民など25名が参加した。参加者の属性は、平日の昼間の開催ということもあり、主婦や60～70代の高齢者が中心であった。

ツアーのガイドは、既述の石井氏を含む、記念館友の会会員でもある2名が務め、事前の下見などの準備を行った。当日、参加者には、マップ、訪問地の紹介資料、後述のマップ製作をPRする新聞記事資料が配布された。

ガイドによる解説は、例えば、旭川電気軌道の旧電車(別図2-番号④、写真8)や旭山の自然(別図2-番号⑩・⑪、写真9)について、自身の幼年時の思い出を披露しながら、それら地域資源の魅力をたっぷりと語るものであった。時にはユーモアを交じえたガイドの解説に、参加者からは、しばしば笑い声が上ったり、たくさんの質問が出るなど、地域資源への高い関心が引き出された。

そして記念館(別図2-番号②、写真10)は、同ツアーの主要な訪問地の一つであった。そこでは、マップ製作部会のメンバーでもあり、現館長代理をつとめる職員が、旭川兵村の成り立ちや米の大量生産に取り組んだ歴史、「屯田兵絵巻」の内容などを、同館所蔵の実物資料を示しながらマップの掲載文を深く掘り下げた解説を行い、参加者の理解を促すこともできた。

2018年7月、東旭川ペーパーン地区は、集中豪雨によっ

て河川が氾濫し、農地や道路等に大きな被害を受けた。一方で、同地区は、同ツアーにおいて5箇所の訪問地があり、多くの見どころが集まっていた。

これらの中でも、上ペーパーンに位置する歴史的建造物「養蚕民家」(別図2-番号⑪、写真11)の訪問では、同建造物の模型(現在は記念館所蔵資料)の製作を手がけたガイドによる、戸袋の形態や同建造物の内部の構造に言及する詳細な解説があった。こうした解説は、養蚕業が盛んな福島県の出身者によって開拓が始まった同地の歴史に対する、参加者の関心を喚起するものであった。

そして、森林公園「旭川市21世紀の森」(別図2-番号⑬・⑭、写真12)では、マップにも描かれる、東旭川の豊かな自然が、道外高齢者キャンパーを誘客するすぐれた地域資源になっていることを、参加者が実地に納得することができた。

さらに、上南部水神宮(別図2-番号⑫、写真13)を訪問し、参加者は、「美味しい」、「飲むと身体が丈夫になる」、「病気を治す」などと伝わるわき水を試飲した。1921(大正10)年頃からこのわき水が尊ばれ、1929(昭和4)年に信者によって水神宮の祠がつけられたとの紹介もあり、参加者は地域資源の歴史と魅力とを、五感を通じて体験できた。

ペーパーン地区では、移動の車窓から、7月の集中豪雨による路肩決壊や浸水の跡地など、災害の爪痕についても確認できた。

ツアー終了後、参加者からは「楽しかった」、「勉強になった」という感想と共に、「東旭川の名物」としてマップに掲載されている食品を買いたいといった希望も見られた。後日さらにマップの入手希望もあった。

ガイドをつとめた石井氏からは、後日筆者へ、ペーパーン地区をはじめとする、東旭川の人口減少や地方創生について問題意識を述べる書状があった。

(3) 報告書発行と波及効果

本マップに関連する成果として、2018年3月、筆者は、本マップ製作をモデル事例の1つとしてまとめ、地域博物館が高齢者と協働して実践する「地域学習プログラム集」(青柳 2018、写真14)を刊行した。友の会と記念館は、本書の編集と校正に協力した。本書は2018年6月に、北海道博物館HPにて公開された。これを契機に、北海道新聞より筆者に寄稿依頼があり、同紙夕刊文化面と同紙ウェブ記事によって、マップ製作の重要性や効果を、マップの入手先情報とともに、全道・全国規模でPRすることができた。

こうして、複数の媒体によってマップの普及を実現できるようになった。その結果、記念館にマップ入手の問い合わせがあったほか、ウェブから情報を入手した高知県議

会議員および関係者計12名が北海道博物館を来訪し、同議員の希望により、筆者による東旭川のマップ製作を話題とするレクチャーを受講した。地域を超えて、東旭川のマップ製作の意義と効果について普及することができた。

5 まとめと考察

(1) マップの製作とその効果

マップ製作と子ども向けの文章づくりは、多く（前者62.5%、後者75.0%）の製作者にとって初めての経験であったが（表3～4）、役割分担がうまく機能し（図1）、製作者の資質と既存の学習成果の活用、「1年以内に完成」という目標の明確化によって、参加型会議・行事計13回によって、9ヵ月でマップが完成した（表2）。高齢者の参画によって、彼らの記憶や地域の生活文化をアーカイブするマップを実体化できた。アンケートでは、製作者に、知識の獲得や地域の魅力の再発見といった学習効果が認められ、文化伝承への意欲の形成という製作目的も達成できた（図2）。また、マップ完成報告会では、製作者による見どころ紹介もあり、参加者に面白さが伝わって、地域の文化伝承への意欲が共有できた（図3）。マップを高齢者向けの回想法の素材として活用できる可能性も見いだせた（表5、図3）。製作者には、市民活動の持続性の素地となる、高い動機付けができた（図4）。

(2) マップの活用と今後の課題

他方、キーパーソンの急逝という予期せぬ事態があり、マップの活用に関しては目標の具体化ができず（図4、3-(3)-2）、マップの活用は一時失速してしまった。しかし、地域活性化に強い問題意識を持つ、マップ活用計画リーダーが牽引役となり、公民館や市民団体との連携によって、バスツアーや散策会などのマップ活用事業を実現できた（4-(1)）。

ツアーでは、参加者に地域資源の探索の場を提供でき、地域の魅力の共有が行われていた。また、友の会会員や記念館職員による解説によって、マップの掲載内容を掘り下げた情報提供ができ、参加者は東旭川の歴史・文化・自然について、より深い知識を得ることもできた（4-(2)）。

本研究で明らかにできた課題は、高齢者には体調不良、死という困難があり、彼らを成員とする地域活動では、早期からのリーダーとその後継者の育成が必要なことである。

さらに、今回のように効率やスピードを重視した活動運営は、製作者の集中力の維持や主体性の喚起に効果があった反面、目的（本事例では「東旭川の文化伝承・絆の実現」）が手段（「マップの完成」）の陰に埋もれてしまいやすいことである。これを防ぐには、タイム・マネジメントの担当者（リーダー、ファシリテーター、事務

局ら）が、「マップの普及・活用」の議論に十分な時間を確保し、達成度合いをチェックできる「目標」の具体化を、メンバーが十分に取り組めるように促すことが重要である。

これらの実現のため、逆境においてメンバーの主体性を持続させるには、「共感のマネジメント」（松本2003）が重要である。すなわち、「東旭川を活性化したい」、「マップの完成後は、マップの活用が重要」といった問題意識を持つ、行動できる人材をもち立て、そうしたリーダーの元に、今回の部会メンバーをはじめ、マップの製作目的（活動使命）に共感できる人を集めて組織化すること、彼らがそれぞれの持ち場で主体性を発揮できるように、マップ活用の実行計画や目標の具体化を進めることが課題である。

本事例で示された「東旭川の文化伝承・絆の実現」という活動使命は、地域内の様々な組織・機関の使命と重なり、共有できる可能性がある。この使命と目標とを分かりやすく示すことで、リーダーの采配とそれを補佐するサブリーダーの協力で、メンバーの人脈を活かして協力者を拡大させることが重要である。

例えば、今回のバスツアーの事例のように、マップの活用事業を行う際、市民団体単独では実施が難しい、住民への幅広い広報や移動手段の確保なども、公民館や観光・商工関係組織、他の市民団体と連携することで可能になる。

さらには、今後、地元の小学校や児童会館などと連携行事を行うことで、今回マップの優先的なターゲットとした、子ども達への普及も実現できると考えられる。このことは、高齢者を主体とする地域活動の継続性を担保する、リスク・マネジメントの視点からも必要であろう。

このような観点から、事業を継続的な地域学習活動へと展開させることによって、マップの活用を、高齢者が活躍でき、異世代交流できる場づくりや住民自治へとつなげる道筋が重要である。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、旭川兵村記念館 副理事長兼旭川兵村記念館友の会会長 芦原高穂氏、旭川兵村記念館 前館長 上田良博氏（故人）、館長代理 中谷良弘氏、旭川兵村記念館友の会マップ製作部会 マップ最終チェックリーダー 百井昌男氏、山崎勝美氏、マップ活用計画リーダー 石井征士氏、同部員 鈴木トミ子氏、武田知憲氏、藤崎百合子氏、東旭川公民館館長 成田 司氏、旭川兵村記念館友の会会員 中野孝俊氏、早坂有美氏に大変お世話になりました。なお、芦原氏、上田氏、中谷氏には、マップ製作部会部員も兼任いただきました。本研究は、JSPS科研費15K01153、同18K01108の助成を受けたものです。深くお礼申し上げます。

注

- (1) プレインストーミング等でカード化された多くの意見・アイデアをグループ化し、論理的に整序して問題解決の道筋を明らかにしていくための手法を指す(川喜田 1967)。
- (2) 「屯田兵絵物語附屯田兵絵巻4巻(2016年北海道有形文化財指定)」を指す。以下同じ。

引用文献

- 青柳かつら 2014. 地域再生をめざした博物館を核とする地域資源ナレッジマネジメントに関する研究:住民参加による地域資源マップ製作. 北海道開拓記念館研究紀要. 42: 1-22.
- 青柳かつら 2016. 高齢者と協働するナレッジ活用型地域資源学習プログラムの開発:2015年北海道と2003年全国の博物館園対象高齢者プログラムアンケート調査結果の比較から. 北海道博物館研究紀要. 1: 87-102.
- 青柳かつら 2018. JSPS科研費15K01153報告書1. 博物館を拠点とした高齢者と協働する地域学習プログラム集. 北海道博物館. <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/post/news/detail9281/> (2018年12月18日アクセス)
- 北海道博物館 2016. ビジュアル北海道博物館. 北海道博物館.
- 堀 公俊 2006. ファシリテーション入門. 日本経済新聞社.
- 川喜田二郎 1967. 発想法. 中央公論社.
- 国立社会保障・人口問題研究所 2018. 日本の地域別将来推計人口(平成30(2018)年推計). 国立社会保障・人口問題研究所. <http://www.ipss.go.jp/pp-shicyoson/j/shicyoson18/t-page.asp> (2018年12月18日アクセス)
- 松本修一 2003. 共感のマネジメント. (社福)大坂ボランティア協会.
- 柴田 博・杉原洋子 2005. 生きがいと社会貢献. (財)長寿科学振興財団(編). 高齢期をいかに生活するか. (株)サンライフ企画. pp. 147-153.
- 吉本哲郎 2008. 地元学をはじめよう. 岩波書店.
- McGregor, D., 1960, *The Human Side of Enterprise*. McGraw-Hill Inc.
- Maslow, A., H., 1943, A Theory of Human Motivation. *Psychological Review*. 50: 370-396.
- Herzberg, F., I., 1968, How do you motivate employees? *Harvard Business Review*. 46-1:53-62.

RESEARCH REPORT

Development of Innovative Regional Education Contents for the Wellbeing of an Aging Society:

Effects and Issues regarding a Regional Resource Map Involving Senior Citizen Participation in Higashi-Asahikawa

Katsura AOYAGI

The aim of this study was to produce a map of Higashi-Asahikawa's regional resources via collaboration between the Asahikawa Heison (Farmer-soldiers Village) Museum, volunteers from the museum's enthusiast club, and the study author. This study further sought to ascertain the effects of this map, and identify issues regarding the map. We have performed the following: 1) observation of production processes; 2) administering surveys to the map producers and participants of the map completion briefing session; 3) evaluating the map production based upon the motivation of the producers; 4) observing bus tours of the locations listed on the map. In 1), the group held a total of 13 meetings and activities, and completed the map in nine months; these sessions effectively employed distribution of roles and existing educational resources. In 2), the producers achieved educational

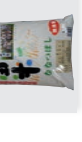
effects such as rediscovery of regional attractions, and formed interest in transmission of Higashi-Asahikawa's culture. Participants in the map completion briefing session felt that the map is interesting, and is useful for transmission of culture. We succeeded in sharing enthusiasm for transmission of culture between the producers and participants. The map has also shown potential to be utilized in reminiscence. In 3), goals of activities utilizing the map were not sufficiently established. In 4), we succeeded in creating an opportunity for tour participants to gain deep knowledge of the appeal of regional resources and the map. Our future challenges are recruiting potential leaders, defining goals for activities and projects, and sustaining utilization of the map and provision of regional education in collaboration with local organizations and institutions.

東旭川市街のまちなみ 入館から120年余での姿は大きく変わりました！

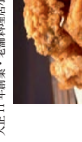


東旭川の名物

お酒・兵衛味噌
秋田県産の酒類は、秋田・秋田県産の酒類です。



味噌・兵衛味噌
秋田県産の酒類は、秋田・秋田県産の酒類です。



味噌・兵衛味噌
秋田県産の酒類は、秋田・秋田県産の酒類です。



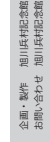
味噌・兵衛味噌
秋田県産の酒類は、秋田・秋田県産の酒類です。



味噌・兵衛味噌
秋田県産の酒類は、秋田・秋田県産の酒類です。



味噌・兵衛味噌
秋田県産の酒類は、秋田・秋田県産の酒類です。

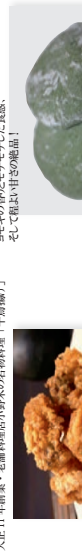


東旭川の特産品が勢ぞろい！

お酒・兵衛味噌
秋田県産の酒類は、秋田・秋田県産の酒類です。



味噌・兵衛味噌
秋田県産の酒類は、秋田・秋田県産の酒類です。



味噌・兵衛味噌
秋田県産の酒類は、秋田・秋田県産の酒類です。



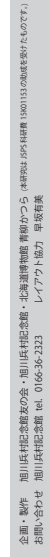
味噌・兵衛味噌
秋田県産の酒類は、秋田・秋田県産の酒類です。



味噌・兵衛味噌
秋田県産の酒類は、秋田・秋田県産の酒類です。



味噌・兵衛味噌
秋田県産の酒類は、秋田・秋田県産の酒類です。



ようこそ！

上川百万石の礎 東旭川へ



ようこそ！



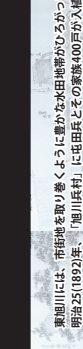
ようこそ！



ようこそ！



ようこそ！



ようこそ！



東旭川

たんけんマップ



たんけんマップ



たんけんマップ



たんけんマップ



たんけんマップ



たんけんマップ



別図1 「ぐるっと東旭川 たんけんマップ」特集画

本マップは、旭川兵村記念館 (Tel. 0166-36-2323) より入手できる



写真1 マップ製作のワークショップ (2016年5月15日)

写真2 ワークショップの結果 出たアイディアは作業用地図上に整理し、一覧表にして次回会議の資料とした

写真3 テーマの絞り込み (2016年6月18日) 追加意見を付箋に記載して地図上で再整理した〔撮影：藤崎百合子氏〕



(次ページ)

写真4 プロジェクターを使用した原稿の読み合わせ

写真5 マスコミ取材を受けた部会会議 (2016年10月31日)〔撮影：藤崎百合子氏〕

写真6 マップ完成報告会 (2017年6月18日)〔撮影：藤崎百合子氏〕

写真7 部会メンバーによる見どころ紹介

写真8 東旭川日帰りバスツアー (2018年9月12日) 訪問地 旭川電気軌道旧電車

写真9 旭山三浦庭園 同ツアー訪問地

写真10 旭川兵村記念館 同ツアー訪問地

写真11 養蚕民家 同ツアー訪問地





写真12 旭川市21世紀の森 同ツアー訪問地

写真13 上南部水神宮 同ツアー訪問地

写真14 マップ製作プログラムを掲載した報告書

本書は北海道博物館HPよりPDFを入手できる（81ページ引用文献欄を参照）